



① 昔々、貝塚に津田村という村がありました。村の中心には津田川という川が流れ、紀州街道がこの川を横切るところに、岸見橋という橋がかかっていました。



② ある頃から、この村でおかしなことが起こるようになりました。村のみんなが仲が良く思っていた夫婦が突然大げんか。みんなは驚きました。後で聞くと、夫婦は何が原因でけんかをしたのかも覚えていないと言います。

③

またちがう日には、いつも仲のいいお隣さん同士が道で大げんかを始めたり、岸見橋で旅人同士がすれちがいざまになぐり合いのけんかをしたり…。けんかの後に話をきいたら、必ず、「どうしてけんかをしたのかわからない。」と言うのです。

こんなに平和だった村で、突然みんながけんかを始める理由がわからず、みんなは心配して、「これは何かの祟りでは?」と疑い始めました。

村の人たちは、この原因を知るためにおがみやさんを呼びました。

おがみやさんは津田川の堤防の上に祭壇をつくり、お祈りを始めました。

一時間ほどお祈りを続けた時です。

突然、白い煙のような、霧のようなものが出てきて、彼の体に入り込みました。

⑤

村人たちは、昔、近くの村が洪水におそわれた時に津田村だけが助かったことを思い出しました。また、他にも思い出すと津田村が守られてきたことがわかるでことがたくさんありました。

村人たちは、みいさんを探し歩きました。すると、津田川の堤防にある大柳の木の下で、大きな蛇、みいさんを見つけました。

村人たちは、その場所に感謝の石碑を建てて、毎日お参りするようになりました。それから、村の中の不思議なけんかはなくなり、再び平和な村になりました。

夏の日には、みいさんが、柳の木で涼んでいるそうです。

『津田のみい(蛇)さん』 ～貝塚に伝わる民話～



④

おがみやさんは、目がつりあがり、異様な顔つきで、両手を大きく広げて立ち上がり、村人たちに向かって叫びました。

「おれは津田川の大柳の木に住んでいるみいさんである。長い間、津田村を守ってきたのに、お前たちはおれの存在に気づかず、感謝すらしておらぬ。だから、ばちをあてたのだ。」

「許してほしければ、おれを祀れ。」



※おがみや…特別な儀式を行って、人々の健康や幸運、安全などを祈る人